

NEWSLETTER #97

関東地区例会報告

p. 1 2013年第2回例会 大和田俊之

理事会からのお知らせ

- p. 3 大会個人発表報告 (NL 掲載原稿) の制度変更について
- p. 4 国際ポピュラー音楽学会日本支部委員会規則の改正について

p. 4 会員の OUTPUT

information

p. 5 事務局より

2013年第2回関東地区例会報告 大和田俊之

2013年7月13日(土) 於: 武蔵大学

トン・クンフォン・ベニー(シンガポール国立大学大学院) 「演歌は如何に聴取されているか？」 -音楽聴取経験におけるノスタルジーについての考察-

修士論文として構想されるベニー氏の発表は、日本において演歌がいかに受容されているかを論じたものである。主として埼玉県朝霞市の55歳から80歳の演歌ファンへの聞き取り調査などに基づいてなされた発表は、非常に興味深い知見にあふれていた。多くの演歌ファンが新曲に関心をもたず、自身の過去の経

験を歌の内容に結びつけていることは容易に想像できたが、その経験が必ずしも共感を誘うものではなく、場合によってはより過酷な経験に対する同情という気持ちを含むことをあぶり出した点は評価すべきである。なぜなら、ここで「ノスタルジー」が、ある意味で個人経験から離れた「抽象的かつ構想的なレベル」で歌とつながっていることを論証する手がかりになるからであり、またそれがイメージとしての「ふるさと」や「古き良き時代」の形成と結びついているからである。しかし同時に、ベニー氏はこうした演歌ファンがもつ「ノスタルジー」の感覚を「国家の文化的記憶」に直接的に結びつける先行研究の主張に懐疑的であり、それがいわゆる「懐メロ」的な機能を越えるものではないのではない可能性についても論じられた。

発表後の質疑応答では、こうした研究においてはそもそも「演歌」の定義が難しいことが挙げられた。時代によって「演歌」の定義や認識が異なることを踏まえないと、同時代的にはむしろ「モダン」な響きを持っていた楽曲が現在の視点からみたときに「演歌」に聞こえてしまうなどのズレが生じてしまう点が指摘された。また、演歌の受容を考察する上で、今回のようにカラオケ喫茶を参与観察の対象とする場合と、一般の演歌ファンとの間では消費の形態がそもそも異なるのではないかという疑問も挙げられた。

とはいえ、アメリカにおけるカントリー・ミュージックと同じように、ある特定の音楽ジャンルが相対的にみて他のジャンルに比べて「ノスタルジー」を中心的な特質として掲げることはありえるし、その受容に関する研究が十分行われてきたとはいえないので、演歌というジャンルにおいて「ノスタルジー」がどのように形作られ、それが社会でどのように機能しているのかを考察する本研究の重要性は揺るぎないと思われた。

赤木大介(大東文化大学大学院)「ポピュラー音楽の歌詞における日英言語の考察」

日英言語翻訳研究の一環としてポピュラー音楽に着目する赤木氏の発表は、日本語歌詞から英語歌詞に翻訳される際のポイントを、ピーター・ロウの先行研究に基づく5項目(Singability, Sense, Naturalness, Rhythm, Rhyme)にしたがって検証するものである。音節と音符の関係やダウンビートと韻の関係など、歌詞の日英言語翻訳の際に生じる基本的なパターンに関する説明がなされたのち、本発表の調査内容が発表された。具体的には、今井美樹の「PRIDE」、一青窈の「ハナミズキ」、小柳ゆきの「あなたのキスを数えましょう」など、日本の有名曲を英語でカバーしたエリック・マーティンのアルバム『MR. VOCALIST』を題材に、それを先の5項目にしたがって比較・評価したものとアンケートの質問項目に対する回答である。全11曲の中で歌詞の日英言語の翻訳がもっともうまく機能したと判断されたのが Dreams Come True の「Love Love Love」であり、もっともうまく機能していない

と判断されたのが Princess Princess の「M」であった。

質疑応答では発表の方法と目的について意見が交わされた。ネイティブ・スピーカーなどへの聞き取りを主とした本研究の手法を疑問視する声も多く、サンプル数やデータの集計方法など、社会調査の方法論上の問題が指摘された。それよりも、専門の英語学を活かして、実際に日本語歌詞から英語歌詞へと変換される際に、具体的にどのような言語(学)的な問題が生じるのかについて分析した方が有益な研究になるのではないかという意見もあった。実際、発表の途中になされた韻や音節に関する具体例の説明は非常に興味深く、ポピュラー音楽における日英言語翻訳に関するなんらかの規則性を解明するうえで示唆的であったと思われる。

佐藤良明「What was Rock? -文明論的アプローチ」

最後の佐藤氏の発表は、「ロック」というジャンルの成立を文字通り文(明)学的に解明しようと試みるものである。「ロックは〈近代〉の心性に対して、破壊的に作用した」、「ロックは性的・自然的・電子的・・・あらゆる快感を肯定する」というテーゼの提示に始まり、「ロック革命」にいたる1920年代以降の流れをクロノロジカルに解説する手法は、これまで語られてきた「ロック」という音楽ジャンルの成立に関するいかなる言葉とも異なっていた。クリストファー・スモールの「ミュージッキング」の概念をクラシック的な音楽観(作品)からロック的な音楽観(行為)への変化と読み替えつつ、ピーター・ファン・デル・マーヴェの「マトリックス」の概念を用いるという記述方法も刺激的だが、なかでも注目すべきは、しばしば「黒人=ブルース」と「白人=カントリー」の混淆として説明されるロックンロール(ロック)の誕生において、「E=elite, European」と「R=rustic, “root”」という階級面の混淆(その峻別の無効化)を強調していた点にある。また、ミシシッピ・フレッド・マクダウエルというブルースマンが1959年にアラン・ローマックスによって「発見」され、65年にローリング・ストーンズの招きによってヨーロッパ・ツアーに参加

する過程が検証されたが、その際にブルース＝黒人文化が、イギリスにおいてよりロマンティサイズされたかたちで受容されたのではないかという分析は非常に重要だと思われた。

発表に続く質疑応答も活発になされたが、まずはじめにロックという音楽ジャンルにみられる「アメリカ性」と「イギリス性」についてどのように考えるかという問いがあげられた。佐藤氏によれば、イギリス帝国主義におけるアメリカ南部の世界史的な位置づけと1920年代の「音響革命」が重要であり、それがマーケットにおいてコンテンツ商品として成立することを可能にしたのだという。また、その結果としてもたらされた「エリート文化の破壊」がロックの成立に不可欠であった点も確認されたが、そうした階級的な側面と同時にティーンエイジャーという「世代」の問題も指摘された。ロックの消費者として「大学生」というカテゴリーがいかに居心地が悪かったかという同年代的な感覚は、その中心的な受容者であるティーンエイジャーという集団の存在がいかにロックという音楽ジャンルの成立に深く関わっていたかという証左である。いずれにしても、ロックという文化を19世紀以来の文明史的な枠組みの中で捉えようとする発表は刺激的であり、第二回関東地区例会は盛会のうちに終了した。

(大和田俊之:慶應義塾大学)

理事会より

1. 大会個人発表報告 (NL 掲載原稿) の制度変更について

日本ポピュラー音楽学会では、これまで年次大会における個人発表の概要について、そのセッションの参加者の中から司会者が報告者を指名したうえで報告原稿を執筆してもらい、ニューズレターに掲載するかたちをとってきました。こうした発表報告記事は、発表を行なった会員の研究内容を広く学会全体に周知させることに役立ち、また個々の研究に関する批評や

議論のきっかけとして機能してきました。

しかし、近年はブログや SNS など、学会外における批評や議論の場が増加してきており、ニューズレターにおける報告制度の必要性が薄れつつあることは否めません。また、当日会場に出席した参加者の中から報告原稿執筆者を指名することは司会・報告者双方にとって多大な負担となっていて、報告者指名を避けるため朝一番の個人発表に参加しない、意図的に遅刻するなどのケースも仄聞いたしますし、場合によっては教員- 学生の関係によって報告の負担を押し付けるなどの問題が発生する可能性があります。

この件について、2013年6月16日に開始された本年度第2回理事会で検討した結果、年次大会個人研究発表の報告体制に関して以下のように変更し、今年度の大会において試行することが決定されました。

- ・年次大会においては、参加者執筆によるニューズレターの個人研究発表報告を廃止する。
- ・代わって、発表者本人が大会終了後に発表概要(1200字程度)を執筆し、ニューズレターに掲載する。
- ・これまで行なってきた、個人発表参加会員による発表報告は、執筆を希望する会員が自発的に行うこととする(一般のNL原稿と同様に投稿扱いとし、個人研究発表について参加者が自由に報告・批評していただくかたちとなります。全ての個人発表について参加者からの報告や批評がニューズレターに掲載されることはなくなります)。

なお、年次大会のワークショップ、シンポジウムについてはこれまでと同様、フロアから報告者を選定し、ニューズレターに執筆していただく形を継続いたします。その際、報告者の選定はコーディネーターの責任で行うこととします。また、報告執筆に伴うワークショップ、シンポジウムの録音についても、コーディネーターの責任で行っていただくこととなります。

地区例会に関してはこれまでと同じく、発表者以外の参加会員から報告者を選定し、ニューズレターに報告を掲載する形を継続いたします。

研究発表やその報告と共有、批評をめぐる状況の変化に本学会としてどう対応するかを踏まえ、理事会に

て真摯に検討した結果、以上のような方式を採用することとなりました。会員の皆様のご理解とご協力をよろしくお願い申し上げます。

2. 国際ポピュラー音楽学会日本支部委員会規則の改正について

日本ポピュラー音楽学会では、会員の国際交流活動と国際的な視野で研究を発展させる目的で、学会内に国際委員会（IASPM-Japan）を設けております。国際委員会は国際ポピュラー音楽学会（IASPM）の日本支部として位置づけられております。

これまで国際委員会の会計（国際委員会特別会計）は日本ポピュラー音楽学会の会計と一体的に運用されてきました（具体的には本学会の会計担当理事が国際委員会の会計を兼ねることを原則とし、監事も兼任としてきました）。しかし昨今、本学会所属の国際会員の比率が減少する傾向にあり、国際委員会特別会計の運用を本学会の会計が行うことができない（本学会の会計理事が国際会員ではない）ケースが増加しております。その事態を踏まえつつ国際委員会の機動的な活動を維持し、また会計トラブルを防ぐべく、2011年度より国際委員会特別会計と学会本会計の運用を分離して取扱うこととし、実質的に国際委員会特別会計を独立した会計としております。

二年間の運用の状況を鑑み、独立した会計運用が国際委員会の活動主旨に合致するものと理事会では判断いたしました。よってその独立会計原則を明瞭なものとするべく、国際委員会会計担当者の選出方法に関して、理事会より国際委員会規則の改正を下記のとおり提案いたしたく存じます。

日本ポピュラー音楽学会 国際ポピュラー音楽学会日本支部委員会規則

旧 第7条

本委員会の会計、監事は、本会の会計、監事が兼ねる。本会の会計、監事が国際会員でない場合には、国際会員のなかからほかの者を理事会が指名する。

新 第7条改正案

本委員会の会計は、委員長が本会の国際会員のなかから指名、または兼務する。監事は本会の監事が兼務する。

2) 本会の監事が国際会員でない場合には、国際会員のなかからほかの者を理事会が指名する。

旧7条では国際委員会の会計担当者を本学会の会計が兼ねることを原則としておりますが、改正案では国際委員会委員長（理事選挙で選ばれた本学会理事より互選）が国際会員のなかから指名あるいは兼務することとし、国際委員会の会計の独立を原則とする主旨の改正案です。監査にあたる監事については従前と同等の扱いとし、会計監査の実効性を担保するものとなりました。

以上の規則改正の是非につきましては、12月開催の年次大会における総会にて議決を行いますので、会員の皆様にはご検討のほどをお願い申し上げます。

会員のOUTPUT

三井 徹

Mitsui, Tōru. “Music and protest in Japan: the rise of underground folk song in ‘1968’.

In *Music and Protest in 1968*, edited by Beate Kutschke and Barley Norton (Cambridge University Press, April 2013), pp. 81-96.

(ISBN 978-1-107-00732-1)

福屋利信

『植民地時代から少女時代へ：反日と嫌韓を越えて』
(太陽出版、2013年7月)

判型・ページ数：四六判・249ページ

定価：1,470円(税込)

ISBN: 978-4-88469-777-8

中村美亜

『音楽をひらく—アート・ケア・文化のトリロジー』

(水声社、2013年6月)

判型・ページ数：四六判上製・256ページ

定価：3,150円(税込)

ISBN：978-4-89176-982-6

遠藤薫

『廃墟で歌う天使——ベンヤミン『複製技術時代の芸術作品』を読み直す』

(現代書館、2013年6月)

判型・ページ数：四六判上製・246ページ

定価：2,310円(税込)

ISBN：978-4768410011

◆ information ◆

事務局より

1. 学会誌バックナンバー無料配布について

現在、JASPM 学会誌『ポピュラー音楽研究』Vol. 1～Vol. 11のバックナンバーは、そのすべての記事が、科学技術振興機構のオンラインサービス、J-STAGEにおきまして無料で公開されております。

(<https://www.jstage.jst.go.jp/browse/jaspmms1997/-char/ja/>)

そのため、事務局に所在する Vol. 11 までの冊子体のバックナンバーを、希望者の方に無料で配布しております(ただし送料はご負担いただきます)。

在庫については学会ウェブサイトの「刊行物」のコーナーに随時記載しておりますので、配布を希望される方(非学会員の方でも結構です)は事務局にお問い合わせください。また、ネット上で内容が全文公開されていない Vol. 12 以降のバックナンバーについては、引き続き通常の販売を行い、無料配布の対象とはいたしません。ご注意ください。

2. 原稿募集

JASPM ニュースレターは、会員からの自発的な寄稿

を中心に構成しています。何らかのかたちで JASPM の活動やポピュラー音楽研究にかかわるものであれば歓迎します。字数の厳密な規定はありませんが、紙面の制約から 1000 字から 3000 字程度が望ましいです。ただし、原稿料はありません。

また、自著論文・著書など、会員の皆さんのアウトプットについてもお知らせ下さい。紙面で随時告知します。こちらはポピュラー音楽研究に限定しません。いずれも編集担当の判断で適当に削ることがありますのであらかじめご承知おきください。

ニューズレターは 86 号(2010 年 11 月発行)より学会ウェブサイト掲載の PDF で年 3 回(2 月、5 月、11 月)の刊行、紙面で年 1 回(8 月)の刊行となっております。住所変更等、会員の動静に関する情報は、紙面で発行される号にのみ掲載され、インターネット上で公開されることはありません。PDF で発行されたニューズレターは JASPM ウェブサイトのニューズレターのページに掲載されています。

(URL：<http://www.jaspm.jp/newsletter.html>)

本年より、8 月の紙媒体での発行号については、会員の動静に関する個人情報削除したものを、他の号と同様に PDF により掲載する予定です。

次号(98 号)は 2013 年 11 月発行予定です。**原稿締切は 2013 年 10 月 20 日とします。**また次々号(99 号)は 2014 年 2 月発行予定です。原稿締切は 2014 年 1 月 20 日とします。

2011 年より、ニューズレター編集は事務局から広報担当理事の所轄へと移行しております。投稿原稿の送り先は **JASPM 広報ニューズレター担当(nl@jaspm.jp)** ですので、お間違えなきようご注意ください。ニューズレター編集に関する連絡も上記にお願いいたします。

3. 住所・所属の変更届と退会について

住所や所属、およびメールアドレスに変更があった場合、また退会届は、できるだけ早く学会事務局(jimu@jaspm.jp)まで郵便または E メールでお知らせください。

現在、各種送付物などはヤマト運輸の「メール便」サービスを利用してお送りしております。このため、

郵政公社に転送通知を出されていても、事務局にお届けがなければ住所不明扱いとなります。ご連絡がない場合、学会誌や郵便物がお手元に届かないなどのご迷惑をおかけするおそれがございます。

例会などのお知らせは E メールにて行なっております。メールアドレスの変更についても、速やかなご連絡を事務局までお願いいたします。

JASPM NEWSLETTER 第 97 号

(vol. 25 no.3)

2013 年 8 月 27 日発行

発行：日本ポピュラー音楽学会 (JASPM)

会長 細川周平

理事 粟谷佳司・大和田俊之・久野陽一・
鈴木慎一郎・谷口文和・増田聡・南
田勝也・毛利嘉孝・輪島裕介

学会事務局：

〒558-8585 大阪市住吉区杉本 3-3-138

大阪市立大学大学院文学研究科 増田聡研究室

jimu@jaspm.jp (事務一般)

nl@jaspm.jp (ニューズレター関係)

<http://www.jaspm.jp>

振替：

00160-3-412057 日本ポピュラー音楽学会

編集：平石貴士